

# 花づな

hanazuna 2012

vol.  
35

## [花づな]

四季折々に咲き競う花々は、精いっぱい自分を自分らしく表現しているように見えます。男女が明るい未来に向かって手をつなぎ合うことを「花づな」の名に託しています。

**Q.** これは何のメニューでしょう？



**A.** はじまりは、スプーンひとさじのぬくもりでした。

写真は、東日本大震災の避難所の黒板に書き出された、炊き出しのメニューです。この炊き出しはたった一人の女性の行動から始まりました。

災害当日、自分も被災者であるにもかかわらず、彼女は倒壊した自宅の冷蔵庫から米と野菜を運び出し、卓上コンロで炊き出しを開始しました。1日目の夜は、鍋で6回900人分のご飯を炊きましたが、一人大きじ1杯しか配れなかったということです。

いつしか、その活動を手伝うグループが自然に生まれ、自衛隊から食料供給をとりつけ、炊き出しローテーションを組むまでになりました。助け合いの輪はどんどん広がり、調理師、衛生の専門家、食生活改善委員も加わって、被災者自身による運営がなされたのです。この炊き出しは避難所が解散になる8月13日まで続けられました。

もしあなたが災害にあったとき、自分にできることは何だと思えますか。

# いざ!にそなえて、 男女共同参画の視点から 防災について考える。

すべては「気づき」から



過去いくつかに渡る震災を教訓として、男女双方の視点を取り入れた防災体制の確立の重要性が、国の防災基本計画に盛り込まれました。

防災の観点は男女共同参画にとって重要な課題であり、

第3次男女共同参画基本計画においても重点分野とされています。

今回の大震災では、地域における男女共同参画が十分でないことが現場のさまざまな問題として顕在化しました。

防災(復興)の取組を進めるに当たっては、男女のニーズの違いを把握して進める必要があります。

## 講習① 9月29日開催

男女共同参画の視点から防災を考えるため、『女性の目で考えるわたしの防災力・地域の防災力UP講座』が豊橋市男女共同参画センター「パルモ」で開催されました。

## ！大災害時に起きてしまう女性への被害

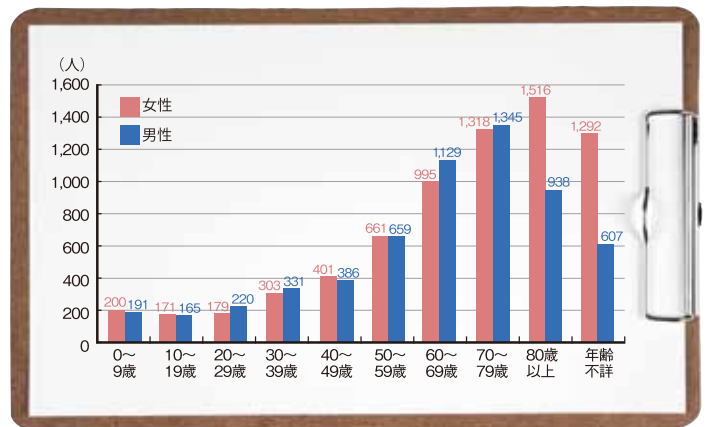
今なお被災地に爪痕を残す東日本大震災。その犠牲者は男性よりも女性が多く、特に高齢の女性が多く亡くなりました。また、生き抜いた女性たちも無防備な状態に置かれました。災害後は女性の人権が守られにくくなり、多くの問題が発生します。

たとえば、清潔が保てず発生する病気など衛生面の問題。ストレスの



はけ口が弱者に向けられる心理面・肉体面での問題。職場の破壊によって離職状態におちいる経済面での問題(再就職は男性優位)。炊き出しの準備や子どもの世話が集中する役割分担の問題。

これらを解決するために、私たちが日頃から取り組めることを考えました。



東日本大震災の男女別・年齢階層別死者数(岩手県・宮城県・福島県)

※警察庁発表資料「東北地方太平洋沖地震による死者の死因等について【3/11~4/11】」より作成  
※4月11日時点で検視等を終えて性別が判明している者について掲載している  
出典/平成23年版男女共同参画白書(内閣府)

もしも、災害が  
起こったら？

### 1 まずは、生き抜いて

大切な家族を守るためにも、まず自分が生き抜くこと。いま元気な人でも、災害時にけがをしたり病気になったら、その人は要援護者になってしまいます。とにかく無事に生き抜くことが、災害時における大前提です。

### 2 家族の連絡方法を決めておく

災害時、あなたは家にいるとは限りません。家族の連絡方法、連絡先、避難場所を決めておきましょう。災害用伝言ダイヤル「171」の使い方も確認しておくといいですね。暗証番号を使った録音ができるようになっています。

### 3 避難所にほしい女性の視点

避難所での要援護者や女性の生活サポートには、女性の視点が必要です。平常時の防災対策・訓練の企画段階から女性の参画が求められます。

### 4 権利の主張ではなく、自主的な参画を

自分が地域の一員であることを意識して、積極的に地域活動に参加しましょう。日常の福祉活動などが災害時の助け合いに役立ちます。自治会や民生委員など地域の理解者との関わりを持ち、顔の見える関係づくりをしておくことが備えになります。

災害ボランティアコーディネーター  
NPO法人はままつ子育て  
ネットワークぴっぴ講師

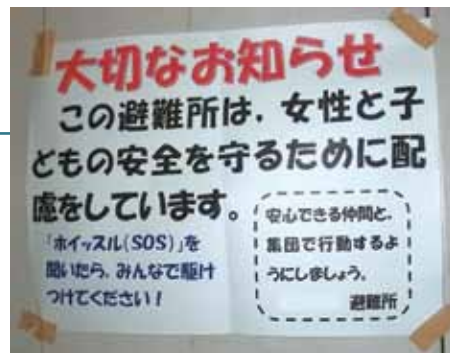
講師: 鵜飼愛子さん





# 女性や子育てのニーズを踏まえた 東日本大震災への対応

避難所における被災者支援では、女性の視点が見過されがちです。避難所での女性のニーズに対応するために行われた、取組事例のいくつかをご紹介します。



## 1 女性のニーズを反映した避難所生活のルール

女性の意見を集約し、日常生活のルールをつくりました。

- 女性リーダー会議を毎日実施し、女性の要望の反映につとめる
- 生理用品や女性用下着等の物資を手渡す担当者を、必ず女性が担当
- 防犯ブザーやホイスル(笛)を配って防犯対策

## 2 女性や子育てに配慮した避難所の設計

生活上のデリケートな面をフォローするために、避難所のレイアウトを見直しました。

- 女性専用スペースを設置し、情報交換や相談が気軽にできる和やかな場づくり
- プライバシー保護のための間仕切りの設置
- 乳幼児のいる家族専用部屋、女性専用物干し場、男女別入浴所・更衣室・トイレの設置



避難所に設けられた女性や子どもたちのための掲出。女性のニーズを反映させるには、女性たち自身が避難所の運営に積極的にに関わり、運営体制の一員となることが大切です

写真出典 / 平成23年版男女共同参画白書(内閣府)

## 講習② 10月6日開催



## 保健師から見た被災地

私が被災地に入ったのは4月の中旬でした。派遣先は岩手県大槌町。町長をはじめ行政幹部の多くが亡くなられた、被災地の中でも犠牲者率が最も高い地区です。避難所内には、臨時の診察室、理容室、洗い場、更衣室などが設けられていましたが、障害のある人や高齢者、母子への支援は後回しになりがちで、サービスの格差が生まれていると感じました。

そんな状況の中、炊き出しの給食システムが被災者自身によって運営されている事例を目にしました。ある女性がたった一人で始めた炊き出しが、人の輪を広げ、互いに協力する避難所を作り上げていたのです。

いざというとき自分は何ができるかを考え、行動に移すことが大切。毎日の生活こそが備えなのだと感じました。

豊橋市保健所保健師  
講師: 花井詠子さん



災害時にも  
ご近所づきあいが  
地域を守る鍵!



## 日頃のコミュニケーション 地域のつながりづくりが大切

### 1 女性リーダーが必要です

避難所は避難者の自主運営に委ねられます。実態として、主に地域自治会が運営主体になりますが、その役員は男性であることが多いため、どうしても女性の意見が避難所生活に反映されにくくなります。女性ニーズへの配慮を得るためには、女性のリーダーも必要です。

### 2 地域ぐるみでまちづくり

地域が抱えている問題が災害時に顕在化します。日頃から防災に限らず、地域ぐるみで暮らしやすいまちづくりを心がけることが重要です。災害のない「今」を大切にして、近所の方と交流を持ってください。防災対策の知識だけでは不十分。ネットワークの支え合いはみんなの宝です。

### 3 男女両者の視点で地域を活性化

これまで地域に居場所を見出せなかった若者や、孤立しがちな高齢者・障害者、声を上げにくかった女性などが、震災を契機に「居場所と出番」を持つことで、これまで届かなかった声が地域コミュニティに表れることが望まれます。



column

## 震災とジェンダー

インド洋の津波では着ていたサリーを脱げなかったため女性が多く亡くなり(注)、泳ぎを知らない女性もいたと言われています。日本の今回の津波ではそこまでのことはありませんでしたが、避難所では男性監督者のもと女性への配慮が足りなかったようです。監督者が管理しやすいように、女性が着替えできるようなプライバシー空間は確保されず、布団の中で着替えしたケースもありました。生理用品の不足についても、従来の災害で明らかになっていながら、改善が進まなかったようです。災害時、女性が弱者にならないためには、過去の経験をきちんと生かすことと、管理決定ポジションに女性を配置することが、解決のためには必要です。

また今回さらに大きな問題は、原発事故による放射能汚染に対し妊婦や子どもたちが最もリスクが高いことで

す。ここで女性は、子どもという最も弱い存在をケアするために自分自身も社会的弱者となるため、子どもとともに社会的に権利が保護されサポートを受けることが必須です。しかし日本社会では子どもと母親は社会的に守られておらず、家庭で実権を握る男性の配慮に依存しています。日本の女性たちは、社会的地位の低さ、権利の弱さゆえ、災害時、子どもの命を守れずまた自らの命も自分で守れない危険があり、これを改善する必要があります。

(注)日本でも、昭和7年白木屋デパート火災で和服の下に下着をはいていなかった女性達がローブ避難時に裾の開くの気にして片手しか使えず多く転落死した事件がありました。

愛知大学文学部教授  
檜村愛子さん



## 「防災力=ご近所づきあい」なんですね。

「わたしの防災力・地域の防災力UP講座」  
受講後アンケートより

**Q.** 講座の内容で、  
今後最も役立つと思われたことは何ですか？

- A.**
- ・近所の地域力が大事ということ(苦手な人とももう少し近づいてみようかと思いました)。
  - ・災害伝言ダイヤル「171」が毎月体験できる。
  - ・災害のときにどこへ行けば良いのか、普段から家族で話をしたり、行ってみたりすることが大事。
  - ・防災に女性の視点が必要だということ。

**Q.** 災害から命を守るために  
一番必要なことは何であると思われましたか？

- A.**
- ・日々、各個人が防災知識を高めることが最も大切。
  - ・母としての心がまえ(子どものためにも自分が病気のけがをしない)。
  - ・自分が住んでいる所を日頃からよく知っておくこと。
  - ・災害を身近なものと感じることが大事。

**Q.** もし避難所生活をしなければならなくなったとしたら、  
何を不安に思いますか？

- A.**
- ・プライバシーの問題、プライバシーのなさから来るストレス。
  - ・女性用品とお風呂、トイレ。
  - ・自分の仕事のこと。
  - ・家族や子どもの体調や心のこと。

### 相談窓口がお役に立ちます

豊橋市男女共同参画センター「パルモ」では、  
女性のための相談窓口を開設しています



### 「女性のための悩みごと電話相談」TEL.0532-33-3098

月～土曜日 午前9時～午後3時

その他、パルモ相談員による「女性面接相談」

女性の専門家による「心の相談」「法律相談」があります。

相談の予約・問い合わせ TEL.0532-33-2822



男女共同参画社会を目指す情報紙 花つなvol.35

発行年月/平成24年1月

発行・編集/〒440-8501 豊橋市役所 市民協働推進課

[ご意見・ご感想をお待ちしています]

電話 0532-51-2188 ファクス 0532-56-5128

E-mail shiminkyodo@city.toyohashi.lg.jp